幸若かわら版

幸若舞の里づくり会
事務局　橋本守行
電話090-7746-8689

第　２０　号
令和　元年　９月　１日

あさひまつり幸若コーナー開設

第四十四回あさひまつりは、台風の影響で一日順延されて七月二十八日（日）開催されました。また、役場新築工事の関係で、会場を西田中旧駅前通りとして行われました。

本年も民謡踊りや山車の巡行のほかふれあい横丁として各種屋台や売店が設置されたほか、町内の各種団体・各区などがＰＲコーナーを開設しました。

本会でも赤玉書店南隣の空き地に張られたテント内に、コーナーを開設しました。ここで、先般制作したＰＲ・ＤＶＤ「越前幸若舞」や山口顧問の解説ＤＶＤをテレビ上映するとともに、関係のリーフレットを配布しました。

また、辻会長をはじめ本会の役員が、「幸若ジャンバー」を身につけて民謡踊りに参加しました。

小浜研修旅行参加者募集！

出発日時場所	１０月２７日（日）午前８時、役場前
到着時刻場所	同日午後５時３０分、役場前
主な訪問地	常高寺、小浜西組まちなみ散策、まちの駅旭座 県立年縞博物館
昼　　食	料亭「酔月」　山口顧問講話
参　加　費	２、０００円／人
参加申し込み	９月３０日までに下記にお願いします。 橋本　090-7746-8689　または 月田　090-2127-7856

浅井三姉妹の次女・お初が建立した常高寺

安土城再建を夢見る会が来町

去る八月九日、滋賀県近江八幡市にあるＮＰＯ法人「安土城再建を夢見る会」（平成二八年設立登記）と「東京江戸ウィーク二〇一九」実行委員会四名のの訪問を受けました。

安土城を築城した織田信長は幸若舞「敦盛」を舞ったとされており、その関係で幸若舞関係情報を求めての来町であった、

同法人理事長の尾崎信一郎氏の説明要旨は次のとおりである。

安土城　１５７９年信長が築城した。１５８２年の本能寺の変後、天守（天主）などが焼失し（原因については諸説あり）１５８５年廃城となった。大正以降滋賀県などにより発掘調査が行われているが、再建には至っていない。

平家物語の冒頭の一節「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす…」と平敦盛と熊谷直実とのエピソードが日本人の精神構造の基底である。

あらゆる既成の権威を否定した信長であったが、「敦盛」とは、琴線波長があい幸若舞・敦盛を舞ったのではないか。また天守（天主）を中心とした安土城のデザインにはキリスト教に影響が認められる資料が残されている。

「夢見る会」では、まちおこしの一環として安土城を再建し、その郭内において、信長が舞ったであろう幸若舞「敦盛」の再現を期している。

しかし、信長の幸若舞のビジュアルな記録などは残されていない。これまでも映画や舞台などで演じられてはいるがどれもしっくりしない。そこで、尾崎理事長が衣裳**や音曲、所作を**独自の想像力で、再現した。

本日の訪問は、この幸若舞再現に関する隠れた資料はないか、再現案に対するご意見・ご感想をお聞きするために訪問したものである。一連の説明のあと、衣裳もつけられて実演された。

主な意見等のやり取りは次の様である。

舞った信長の衣装は軍装である。

信長が安土城で敦盛をどのように舞ったかはわからないが、一般的にはそのようなことはない。もう少し哀調を帯びたものではないか。

現代版創作幸若舞は哀調をベースとしている。

一行は幸若舞情報センターを後にして織田劔神社に参拝しました。（３面に続く）

安土城再建のイメージ
キリスト教の影響があったとされる

第八〇回幸若講座開催

さる七月二六日、幸若文化情報センターで第八〇回講座が一二名が参加して開催されました。今回は、第三六項「幸若家と将軍・若年寄との交流、身分の変化」と第三七項「狩野探幽、大いに幸若舞を楽しむ」がテキストとされました。このなかで、三代家光までは士分として厚遇された幸若であったが、四代家綱のとき、帯刀禁止令が発布されて、芸人としての扱いがされるようになったこと。また、幕府御用絵師・狩野探幽は幸若音曲を溺愛したばかりでなく、直詮肖像画を土佐光信の真筆と鑑定し、古系図をもたない幸若の由緒を支えたことなどが紹介された。

福岡県みやま市訪問 大頭流幸若舞視察予告

来年１月２０日、福岡県みやま市の大頭流幸若舞を鑑賞する視察団を派遣することを予定しています。募集要領等詳細は次号に掲載しますが、ご承知おきお願いいたします。

当面の主な予定

織田劔神社観月の夕べ	現代版幸若舞上演	９月１５日（日）午後７時
朝日中学校文化祭	幸若舞出演＆授業	９月２３日（月）午前10時55分
西田中白山神社秋季祭礼	現代版幸若舞上演	９月２３日（月）
第８１回幸若講座		９月２７日（金）幸若文化情報センター
小浜研修旅行（別掲）		１０月２７日（日）
朝日地区総合文化祭出展		１１月２～３日

また江戸ウィーク二〇一九は、東京都台東区に拠点をおく一般社団法人「江戸文化振興会」が主催する江戸時代の芸能・和装などを評価・伝承する企画イベントです。本年は「夢見る会」が出展するため、橋本実行委員長がいっしょに来町されました。なお同氏の母君は越前町佐々生の出身とのことです。

Ｔｏｋｙｏ江戸ウィーク２０１９秋まつり

テーマ	日本文化の「きれい」「おいしい」ここにあり
日　時	２０１９年９月２０日（金）～９月２３日（月・祝）、１０時～１９時
会　場	東京都上野恩賜公園
その他	入場無料、来場見込み約１５万人、後援経産省・東京都・観光庁など 出展ブース約６０店舗

現代人の感性に訴え共感を

孝久　治宏

私は、一五年前に、地域の若い人を対象に、自己変革の研修を五年間開催しました。内容は、地域を知り、時代を知り、自分を知り、そして自分を変える、一泊二日の合宿集合研修形式勉強会。毎年、二～三月に四回開催し、五年間で約六〇名が参加しました。

この厳しい経営環境においても、底力のある堅実な経営を進めて、立派な経営をしている会社は、押しなべて『志』が高いことに注目されています。人は『志』、すなわち人生の高い目標を定めたとき、大きなエネルギーがわき生命力が旺盛になります。

そしてさらに、「若い人たちの目を見ていれば、その国の将来がわかる」といわれます。それは、国家に限らず企業でも、そこに働く若い人たちの目に力がなかったら、まず、その企業に未来はないと判断できます。

その次の時代の主人公が目標を失い、とりたてて理想もなく、まして志にも無縁な人生を送っていては、企業の未来が明るく展望できません。逆に、眼光が鋭く、意欲に満ち満ちているならば、やがてその企業は、そのまちは、さらに栄えていきます。

そんな事から、「幸若舞の里づくり会」の取り組みが、地域の若者を中心に、地域の事を知る機会、きっかけになると、今以上に地域に愛着が増していくと思います。当町で誕生し、室町時代、武士たちに愛好された貴重な歴史資源「幸若舞」。戦国武将やその時代の人たちを励まし、勇気づけ、憩いや安らぎを与えてきました。併せて、今という時代がどうなっているのか、明治維新以降のことも理解を深め、それぞれの自己変革、行動変革につながると、その結果、自分の役割と使命を感じ、地域はより豊かになると思います。

どうも、今の時代は、「理性より感性」が求められているようです。そして、組織運営は「支配と命令と管理型から、愛と対話とパートナーシップ型に変える必要がある」と、いわれています。

人々に伝わる情報が、新聞、テレビ、ラジオ、雑誌等のマスメディア中心だったのが、個人個人、それぞれが、色々な方法で入手できるようになり、同じく発信できるようになりました。自然と人々の価値観が多様化し、感性が重んじられています。同時に、未来を予測することが、非常に困難な時代に生きる私たちは、個人も組織も、自ら未来をつくっていくしかありません。誰もが、ゼロから新しい価値を創造する場面に、直面していくようです。そこで、世の人の感性に訴え、共感を呼ぶ必要があります。

最後に、幸若舞の創始者とされる桃井直詮は、中世の武士や庶民の感性に訴え大きな共感を呼び、能楽に並ぶ中世芸能として、日本文化形成や日本人の精神に大きな影響を与えました。「幸若舞の里づくり会」の活動が、現代人の感性に訴え共感を呼び、〝命から湧き上がる欲求、欲望、興味、関心、好奇心実現の一助となる必要がある事を強く感じます。

（朝日地域コミュニティ運営委員会副委員長・本会会員）

本会活動に関するご提案、ご意見、ご感想などのご寄稿をお願いします。
かわら版編集部